さて最後にこれ等の所說を讀んで私の思ふ所を述べて見よう。商の原義に關する博士の說に從ふならば、そこには尙行賈としての商が成立する以前の物々交換は何と呼ばれてゐたかといふ問題を殘すことになるのではないかと思ふ。行賈が物々交換を合理化する爲めに、貨幣の發生と共に物々交換から發展したものであるとするならば、その間には言語上にも何等かの關係があつたかも知れない。かくて陳夢家氏の如く物々交換を賞と稱したとする說も亦棄て難い。されば、初め物々交換を賞と稱する事あり、行商が起るに及んで之をも賞と稱したが、之を爲すものは主として商人と稱せられし殷の亡民でありなほ商は金文に於て賞の假借として用ひられてゐるように、其の音同じきを以て、後商が行はれ、賞は廢せられたものではないかと思ふ。この論いさゝか二元論的不明快さあるを免れないが、かく見るならば金文に見える賞の如きは賞・商の中間的なものとして尙示唆に富むものと言へようかと思ふ。

この商の原義論を暫く措くならば、商人行商なる歷史的事實に關する博士の所說は誠に卓論と稱すべく、敬服に耐へぬ所である。更にまた其の思惟の仕方に於いて後學の學ぶべきもの多きを思ふのである。尙陳夢家氏の前揭論文は卜辭・金文中の商周の祭祀に就いて精細に研究せる六十五頁にわたる力作である。併せて同好の士に一讀をお薦めしたい。

（大　島　利　一）

遼海叢書

金　毓　黻　編

自昭和九年八月至十一年三月、遼海書社編纂、大連
右文閣發賣十集一百册。

靜庵金毓黻氏編む所の遼海叢書は一昨秋第一集を出してより以來、刊行の業日を逐うて進み今春第十集を出して完結を告げた。每集十册、共に一百册、收錄する所は實に八十三種の多きに上つてゐる。我が國に在つて滿蒙に關する訪古の史料を蒐めたものとしてはさきに內藤湖南博士の滿蒙叢書が發刊せられたが、事業半ばにして中止せられ、遂にその完成を見るに至らず、學徒のひとしく憾みとする所となつてゐた。該叢書の上梓は實に我が國に於て中絕してゐた滿蒙叢書の刊行が、友邦の學者の手によつてひきつがれたものとも考へられて欣びに堪へない次第である。この叢書編纂の方針を述べて金氏は、凡そ一地方の叢書を刻するには必ず一地方を以て範圍と爲すのが定例となつてゐるが、吾が遼海叢書に在つては則ち然らず、專著（遼海先正の著述）、雜志（作者は遼海

の人に非ざるも掌故に資すべきもの)、文徵(その原書已に佚したれば之を他書より綴集して僅かに能く編を成すもの)の三類に照して廣く蒐錄し、又原書已に佚して零篇斷簡の徵すべきものなきものは別に遼海經籍考を撰んで豫め存目を懸けて以て徵訪を待つことゝしたといひ、又專著、雜志、文徵、存目の四例が創められて叢書の用始めて宏しといさゝか自負してゐる(遼海叢書緣起)。この方針に從つて廣く多く蒐錄するを旨としたために、結果に於て少しく雜多の感を伴つてゐるのは蓋し已むを得ない所である。然しながら、鳳城瑣錄、瀋故、遼東志、全遼志翰苑、使遼語錄、雪屐尋碑錄、滿洲祭神祭天典禮(滿文を省略してゐるのは遺憾であるが)その他幾多貴重なる文獻を收錄し、家藏の稿本及び傳鈔本にして未だ印に付せられなかつたものや已に印に付せられてはゐても時久しくして絕版となつてゐるものを手近に見ることを得しめることは全く感謝の外はないのである。左に收錄書目を揭げて檢出に資し、併せて金氏勞苦のあとを偲ぶことゝする。收錄文獻の性質や收錄の事情等に關しては各書卷首に之を記するもあり、又第十集には總目提要を附して要述してゐる。就て見られたい。

第一集

遼小史一卷 明楊循吉撰 傳鈔本○金小史八卷 同上 同上○遼方鎭年表一卷 江寧吳廷燮撰 稿本○金方鎭年表一卷 同上 同上○渤海國記三卷 崇仁黃維翰撰 稿本○松漠紀聞二卷 宋洪皓撰 顧氏文房小說本○扈從東巡日錄二卷 清高士奇撰 原刊本○柳邊紀略五卷 清楊賓撰 仰視千七百二十九鶴齋叢書本○鳳城瑣錄一卷 清博明撰 博明三種本○瀋故四卷 清楊同桂撰 原刊本○灤陽錄二卷 朝鮮柳得恭撰 傳鈔本○燕臺再游錄一卷 同上 同上

第二集

遼東志九卷 明嘉靖十六年重修 據活字本覆刻○全遼志六卷 明嘉靖四十四年修 傳鈔本

第三集

遼陽州志二十八卷 康熙二十年知州楊璥修 鈔本○鐵嶺縣志二卷 康熙十六年知縣賈弘文修 刊本○鐵嶺縣志二卷 康熙二十二年知縣李廷榮補輯 鈔本○錦州府志十卷 康熙二十一年知府劉源溥孫成修 鈔本○塔子溝紀略十二卷 乾隆三十八年理事通判哈達清格修 原刊○岫巖志略十卷 咸豐七年岫巖鳳凰城海防通判台隆阿修 傳鈔本○何氏瀋陽紀程一卷 清江寧何汝霖撰 原刊本○潘氏瀋陽紀程一卷 清吳縣潘祖蔭撰 原刊本○東北

輿地釋略四卷 興義景方昶撰 稿本○黑龍江輿圖一冊 六十一幅武進屠寄撰 石印本○黑龍江輿圖說一卷武進屠寄撰 活字本

第四集

醫閭集九卷 明義州賀欽撰 明刊本○耕煙草堂詩鈔四卷 清瀋陽戴梓撰 原刊本○慶芝堂集十八卷清瀋陽戴亨撰 原刊本○在園雜志四卷 清遼陽劉廷璣撰 原刊本○愛吟草一卷 前章一卷附和詩一卷及題跋殉節錄 清承德常紀撰 原刊本○解脫紀行錄一卷清錦州金科豫撰 稿本○三槐書屋詩鈔四卷 清錦州金朝觀撰 稿本

第五集

皇清書史三十六卷附皇清書人別號錄 義州李放撰 稿本○畫家知希錄九卷同上 同上

第六集

遼文萃七卷附遼史藝文志補證一卷 清王仁俊撰 原刊本○黃華集八卷 金王庭筠撰 遼陽金毓黻輯本○雙溪醉隱集六卷 元耶律鑄撰 清李文田箋 知服齋叢書本○李鐵君文鈔二卷 清李鍇撰 用傳鈔本補輯○含中集五卷清李鍇撰 傳鈔本○瑤峰集二卷 清王爾烈撰 遼陽金毓黻輯本○兩漢字句異同考一卷 清蔣國祚撰 附兩漢紀本○指頭畫說一卷 清高秉撰 昭代美術兩叢書本○白石道人歌曲疏證六卷附別集一卷 近人陳思撰 稿本○白石道人年譜不分卷 同上 同上○清眞道人年譜不分卷同上 同上○稼軒先生年譜不分卷同上 同上

第七集

全遼備考二卷清林佶撰 傳鈔本○東三省輿地圖說一卷 清曹廷杰撰 原刊本○西伯利東偏紀要一卷 同上 振綺堂刊本○東北邊防紀要二卷同上 藩屬輿地叢書本○盛京疆域考六卷清楊同桂孫宗翰同輯 聚學軒叢書本○錦縣志八卷 康熙二十一年知縣王奕曾劉惠宗修 北平圖書館藏稿本○廣寧縣志八卷 康熙二十一年知縣張文治項蕙修 同上○寧遠州志八卷 康熙二十一年知縣馮昌奕王琨修 同上○蓋平縣志二卷 康熙二十一年知縣駱雲修 同上○開原縣志二卷 康熙五十七年知縣劉起凡周志煥修 同上○布特哈志略一卷龍江孟定恭撰 稿本

第八集

翰苑一卷 唐張楚金撰 據日本京都帝大景印本覆校○遼東行部志一卷 金王寂撰 藕香零拾本○附鴨江行部志節本一卷 同上海鹽朱子藏鈔本○使遼語錄一卷 宋陳襄撰 靜嘉堂文庫藏鈔本○嘉慶東巡紀事三卷 闕名 鈔本○遼紀一卷 明田汝成撰 靜嘉堂文庫藏鈔本○遼陽聞見錄二卷 清顧雲撰 傳鈔本○鮮話一卷清佟世思撰 與梅堂遺集本○耳書一卷同上 同上○旗軍

志一卷清金德純撰　學海類編本○蜀輶紀程一卷清文祥撰　文文忠公事略本○巴林紀程一卷同上　同上○棟亭書目四卷清曹寅撰　上虞羅氏傳鈔本○四庫全書輯永樂大典本書目一卷清孫馮翼撰　抱經堂本○附永樂大典書目考四卷近人郝懿柏撰稿本○瀋館錄七卷朝鮮世子從臣撰　上虞羅氏藏鈔廣史本○附瀋陽日記一卷朝鮮宣若海撰　朝鮮刊本

第九集

雪屐尋碑錄十六卷清盛昱撰　稿本○滿洲祭神祭天典禮六卷清乾隆年官修　武英殿本○夢鶴軒楳澥詩鈔四卷清繆公恩撰稿本

第十集

易原十六卷清多隆阿撰　稿本○毛詩多識十二卷同上　傳鈔本　嘉業堂刊本　遼陽張氏排印本○慧珠閣詩一卷同上　稿本○毛詩古樂音二卷清張玉綸撰　稿本○夢月軒詩一卷同上稿本○大元大一統志殘本十五卷輯本四卷攷證一卷附錄一卷近人金毓黻等輯

なほ遼海叢書附集として別に永樂別錄二卷近人吳廷燮撰　稿本凡二册○宣德別錄二卷同上　同上凡二册(以上未發行)○滿洲實錄八卷清代官修　凡四册○熱河志一百二十卷乾隆四十六年官修　凡二十四册

がある。中にも熱河志の刊行は斯界の翹望する所となつてゐた爲に非常に歡迎せられてゐる。

(外山軍治)

○前號拙稿「山西を中心とする金將宗翰の活躍」六頁十八行、「さきに宋より降りし」の宋は遼、七頁十七行「義勇軍」は「義勝軍」の誤、十七頁十二行「太宗卽位」の四字は抹消。なほ表紙、裏表紙、及總目次に「宋翰」となつてゐるのを宗に御改め下さい。

追記

(七十七頁より)

シャバンヌ博士の佛譯「史記」を見ると、(一)年號制定の時期は元鼎三年である。(二)史記封禪書に元狩を三元としてゐるが、これは誤であつて、司馬遷が元朔を脫落したのである。この二點を承認してゐる。眞に我が意を得た卓見である。(Chavannes, Les Mémoires Historiques de Se-ma Ts'ien. tome 1 P.C. tome 3 p. 474)

拙稿第一卷第五號の誤植

一八頁	九行	崇を崇
一九頁	五行	班書を遷書
二五頁	三行	執を勢
二五頁	四行	傳を傳

に訂正。

(藤田至善)